寄稿　シニア・ライフ体験中

大道　豊彦（おおみち　とよひこ）
NPO法人　国際社会貢献センター
コーディネーター

1．定年退職して

定年退職は63歳の時だから、早くも7年が経つ。この頃、人に会うと「何をしておられますか」とよく訊かれる。答えようとすると大概は「悠々自適ですか」とくる。「晴球雨読」とか称して毎日のようにゴルフをしている先輩や豪州に定住してぶらぶらしている後輩など悠々自適組も多いから、それも無理はない。ただ、私には悠々自適は向いていない。旅行に行っても、プールサイドに寝そべって本を読んでいるといったような芸当は無理で、社会科見学的にせかせかと見て廻っていないと落ち着かない。

だから、退職後のことを意識しだした頃も、今の言葉で言う「シニア・ライフ」の選択肢として悠々自適はなかった。とは言え、サラリーマンを引退すれば有り余る時間の処理に困るのは必至である。精神と肉体の時間販売業の廃業だとか、自由人への完全復帰だなどと喜んでいる場合でもない。しかも、人並みに「ＰＰＫ（ピンピンコロリ）」を標榜していたので、人生の賞味期間いっぱいは生き甲斐を持ってピンピンしていて、賞味期限切れと同時に即コロリと逝くことが願いであった。

このようなわけで、一気に駆け抜けてきた感のあったサラリーマン生活40年間を顧みたところ、やってきたのは自分の生活のためのカネ儲けと会社の利益のためのカネ儲けだけだったことに気づいた。エコノミックアニマルなどとアニマル呼ばわりされたのだから、それは間違いない。だとすれば、退職後はカネ一辺倒を撃ち止めにし、今度は自分の知識と経験を活用するなかで多少でも社会のためになる仕事をすべきではないかと思い始めた。

当時、年金制度崩壊の不安がなかったこともあるが、それはPPK実現のためにも正解のように思えた。ただ、「何が社会貢献か」はよく分からないままだった。

2．再就職について

だからというわけではないが、その時点で、退職後は社会貢献活動に邁進（まいしん）と決めたわけではなかった。実は、再就職できないものかと考えていたのだ。職場から墓場への直行は困るが、再就職しても数年間だろうからその心配はないし、社会貢献活動はそれからでも遅くない、というのが本音であった。

ところで、大企業の定年退職者の再就職先は中小企業とほぼ決まっている。現役時代に大企業としか取引のなかった人の中には中小企業への就職に抵抗を感じる人も多いが、私は長年にわたり中小企業の子会社に出向していたし、中小企業の取引先との付き合いも多かったので、中小企業に対する違和感はなかった。というより、退職後に活かせる自分の強みは中小企業の経営能力だけだと考えていた。このため、公私ともに親しくしていた得意先の中小企業の社長から「退職後は経営を手伝って欲しい」と言われた時、その話には魅力を感じた。

その社長は一代で同社を築き上げた、やり手の超ワンマン経営者であったが、極端な専制的リーダーシップのもと同社では人材が育

っていなかった。社長がいなくなれば会社はすぐ倒産という状態にあったから、私の活躍の場は大きいように思えた。しかし、その社長は例えば「事業計画などは要らない。予算は俺の頭の中にある」などと公言していたのだが、誰かが正論でも吐こうものなら喧嘩になるのが落ちであった。雇用される身となり対等の立場を失ってからでは、喧嘩にもならないのは明らかであった。イエスマンに徹すれば首は繋がるだろうが、それでは同社に居る意味がないし、第一、活性酸素で身体がもたなくなるに決まっていた。結局、その話は断った。

退職直後の1年間、雇用保険の失業給付を受けた。その間、就職活動が義務づけられていたので、新聞広告をよく見ていた。たまに「60才以上歓迎」とあったが、それらは応募者の知識や能力を求めるものではなく、持っているコネを利用しようとするものばかりであった。今さら頭を下げて廻るのも嫌だし、それに知人を一巡すればお払い箱になるのは分かりきっていた。結論として、何だかんだと贅沢を言っていたお蔭で、再就職は実現しなかったのであった。

3．社会にとって、そして自分自身にとって

それを見越していたからというわけではないが、退職の少し前から、ビジネス英語の翻訳の勉強を通信教育で始めていた。別に英語は好きでも得意でもなかったが、雑文を書くのは好きだったので、翻訳はシニア・ライフ向きだと考えたからだ。これは予想外に当った。現在も毎月、翻訳会社から受注して契約書などの翻訳をしている。

2001年秋、「国際社会貢献センター」（ABIC）からコーディネーターにならないかと誘いを受けた。それを安請け合いした結果、はからずも懸案の社会貢献活動の末端に何とか辿り着くこととなった。ABICは日本貿易会が設立したNPO法人で、商社などの退職者の知識と経験を活用した社会貢献を目指している。コーディネーターの仕事は社会のニーズを見つけ、それに合った人材を登録会員の中から選んで紹介することにある。そして、その紹介された会員がアドバイザーや講師、通訳者などとしてサービスを提供するのである。サービスは原則とし有料ではあるが、料金や報酬は世間相場より安くなっている。

これら会員の活動は国内外の様々な分野に及んでいるが、そのいずれもが商社等退職者ならではの語学力、海外駐在経験、業界知識などを活かしたものである。活動会員の中には、フルタイム正社員としての再就職先を期待する人や世間相場並み報酬のパートタイマーを希望する人もいるが、主流派はフルタイムよりパートタイムをむしろ歓迎し、報酬にもあまりこだわらない人達である。自分の知識や経験を役立てる中で多少なりとも社会に貢献することで、密かに自己満足を味わうとともに生き甲斐も感じたいとする人達だと言える。「暇つぶし、ボケ防止、小遣い稼ぎの中での社会貢献」のスタンスである。

私としてはコーディネーターの活動が、サービスを提供した企業や団体に貢献しているのは勿論として、サービスを提供する活動会員本人にも貢献していると自負している。また、ABICの大スポンサーである日本貿易会と更にはそのまたスポンサーである商社等の社会貢献活動の一端であることも認識している。同時に、自分自身のシニア・ライフにとってのメリットも感じているのである。

ただ、登録活動会員が1,400名以上にもなったことを考えると、ABIC全体としてまだまだ紹介件数が少ないことは認めざるをえない。コーディネーターとしては今後いっそう努力して量的拡大をはかるとともに、人材紹介という現在の単純なビジネスモデルに加え、新たなビジネスモデルを開発して質的拡充もはかる必要がある。団塊の世代が卒業し、登録会員が急増する日が目前に迫っている。急いで業容の拡充に拍車をかけなければならない。ボケる暇がないのは嬉しいことだ。